

KEIWA COLLEGE REPORT

第 54 号

April 2008

敬和カレッジ・レポート

発行/敬和学園大学後援会
敬和学園大学広報委員会

KEIWA COLLEGE REPORT

April 2008

発行所/敬和学園大学 〒957-8585 新潟市中央区南出島1-19-1 Tel:025-283-2151
印刷所/オンライン印刷所 〒950-0963 新潟市中央区南出島1-19-1 Tel:025-283-2151



第14回卒業式答辞

CLOSE UP

「小さな森のなかで」 学長 新井 明

まっすぐ未来へ「第14回 卒業式・謝恩会」

学生のお酒「わ」が完成! / お餅でつながる笑顔「留学生交流会」

新発田学研究センター開所から1年「学びを地域に還元」

学内合同企業説明会を開催 / 退職された教員からのメッセージ

生涯学習をバックアップ「オープン・カレッジ、科目等履修生、シニア入試」

2008

KEIWA チャレンジ学生ファイル②1

英語文化コミュニケーション学科 卒業

樋口直紀

「一期一会」



「疲れたー。」帰路につく車中、こうつぶやいていることが少なくありません。慣れない環境は見習いの体に疲労を蓄積していくのだと実感しました。4年間の学生生活もあっという間に終わりを告げようとしている今、私は就職先の新潟日報社で一足早く社会人を経験しています。

編集局で働き始めたのは12月のはじめ。卒業までの4ヶ月間、私は学生生活を楽しむことより少しでも早く社会人に近づくことを選びました。最近先輩の仕事を目撃してパソコンに向かい、ひたすらキーボードをたたき、「たうん情報」というものを作成しています。仕事はとても単調で、イベント情報などを記事の規格に合うようにまとめ、主催者に内容の確認をし校正を行い、提出するというものです。ですが、ほんのちっぽけな記事でも新聞にしっかりと載っているのを見ると本当にやりがいを感じ、かつ誇りを持てます。同時に私も新聞制作に関わっている1人であるという責任の重さが身にしみります。この仕事は配属先の決まっていない私にとってもう一生経験できないものかもしれない考えると、単調でも大変貴重な時間を過ごしている、こんな風に感じます。

前途多難ですが、これからは「半社会人」から脱却し、社会人となり、会社にとって、また会社に関わるすべての人にとって有益な人物になっていけるよう、1つずつ努力を重ねていきたいと思います。そして仕事にしても付随する人間関係にしても今経験できるすべてをこれからの自分の血肉とするため、働いている時間を大切にしていきたいと思っています。



敬和学園大学の最新情報

キャンパス日誌

検索

www.keiwa-c.ac.jp/nisshi/



ケータイ用



卒業式終了後、新潟市内のホテルに会場を移し、卒業生主催の「卒業謝恩会2007」が行われました。いつもより華やかに着飾った卒業生たちは、会場に集まった保護者の皆さんや教職員たちと一緒に、リラックスした表情で4年間の思い出を語り合いました。

大学の研究室や事務室には、たびたび卒業生たちが訪ねてきます。卒業生たちは、自分や友人たちの近況報告や仕事のことなどひとしきり教職員と話をし、また笑顔で帰っていきます。敬和学園大学は小さな大学ですから、教職員それぞれが学生一人ひとりを見つめて接することができ、その関係が卒業後も続いているのです。今年卒業した彼らが、またいつか、大きく成長した姿で敬和学園大学に立ち寄ってくれる日が楽しみです。

もくじ

CLOSE UP 「小さな森のなかで」	1	スタディ・ツアーつき授業を開講	10
まっすぐ未来へ「卒業式・謝恩会」	4	科目等履修生・研究生のご案内	10
新しい世界に旅立つ前に 卒業準備委員会	4	シニア入試のご案内	10
卒業生からのメッセージ	5	オープン・カレッジのご案内	11
学生のお酒「わ」が完成！	6	大学施設を開放しています	11
留学生交流・餅つき大会	6	同窓会リレー・エッセイ⑥丸山隆也	12
新発田学研究センター開所から1年	7	寄付者ご芳名	12
学内合同企業説明会を開催	7	学事予告	12
退職された教員からのメッセージ	8	キャンパス日誌	13

<表紙写真> 「第14回卒業式答辞」
共生社会学科の坂井万里央さんが代表で答辞を述べました (p.4)

小さな森のなかで

学長 新井 明



一

今年はいよいよ冬です。それでもわたしは大学の自室を出て、ときどき雪のキャンパスを歩きます。雪をかぶった樹木たちの姿が見たいのです。寒風に逆らって立つ樺木たち、天に向かって屹立するメタセコイヤたち、黒松、桜、また群れなしてしゃがんでいる樺木たち。寒中でもすでに蕾をつけている木々の姿に敬意を覚えます。

なかでもキャンパスの一隅に立つ数本のユリノキのことが気にかかり、自然とそちらに足が向きます。わたしがここに着任したその年の新入生たちから、入学記念にユリノキを一本ずつ植えてもらうことにしま

した。植樹式をいたしまして、「この木が育つように、諸君も育ってほしい」と話をいたしました。いままで木は五本となりました(学年によっては、卒業記念に植樹をする学年が出るようになりまして、ユリノキの数は全体で十本ほどになりました)。ユリノキの林ができてきました。木にも個性があります。同じ木であっても、よく育つ木もあれば、じっくり型の木もあります。また根を下ろしたその土が木各自の個性に合うかどうかで、育ち方が微妙に違ってきます。土との相性が悪く、枯れそうになる木もあります。担当の職員が土を変えたり、また水はけのために排水溝を掘ったりします。養生には手間ひまがかかるものです。すると、木はやがて気をとれどもどし、また育ち始めます。最初に植えた一本は、この初夏には、そろそろ白い花々をつけ始めるかもしれません。そう思い、そう願って、雪の中に立つユリノキの姿を、ときどき仰ぎに行くのです。

二

一九九一年、敬和学園大学が開学した当時の写真があります。それを見ますと、田圃のなかに土盛りをして平地を作り、その中心部に校舎が建っています。初めは木一



開学のころの校舎

現在の校舎

本もなかったのです。それが今では、やく千本の木が育つ空間となりました。若い森が出来上がってきております。

この森の空間のなかで、小さな大学が生きつづけ、育ちつづけてまいりました。時代を担う若者たちの巣立ちの場としてです。専任教員、やく三〇名、職員、やく三〇名。教育・研究の最前線に立つのは教員であることはもちろんですが、それを背後から黙々と支える優れた職員がいなければ、研究・教育は成り立ちません。優れた教員・職員と、その両者の連携があればこそ、この大学は外部からの「たとえば大学基準協会等からの」高い評価をえることもできるので

す。この教育環境に在ることのできる青年たちは幸せです。敬和の教職員は「偏差値」などという物差しを信用しません。そのよ

うな尺度で人間を量るなどということは、人間性にたいする冒瀆です。人間がこの世に生まれたときに与えられた価値が、妙な尺度で量られて、きみはこういうものしか持つていないよ、などと言われてたまるものではありません。そこで量れない多くの面が、やがて芽を出してきて、その個人に、またその周りに豊かさを与えることになるかもしれないのです。人間を「存在価値」以外のものでも評価するなど、もつてのほかにことです。人としてやるべきことではありません。

樹木たちも、同じような条件下でさえ、さまざまな生き方を示します。タテに伸びるものあり。ヨコに枝を張るものあり。土地に合わぬものあり。しかし脇に立つ働き人の知恵と労力によって息を吹き返すものあり。高度な「耕作」（教養）の力に接して、その木じたいが未知の自己価値を発見して、新たに生きはじめなのです。



入学記念樹（ユリノキ）の植樹

学園における働き人は教員と職員です。優れた教職員が若い世代を導き、生かしてゆきます。その場合に、若い世代の成長に合わせて、（ここが大事なのですが）教職員全体が成長していきます。教職員の成長の認められない学園があるとすれば、（現実にはそういう学園があるのです！）それは教育の庭としては、荒廃の空間でしかありません。敬和の場合は、学生とともに教職員が育つてきています。見ていて、それが分かります。教員と職員と学生の三者が、まさに育ちゆく「愛の共同体」を構成しています。

ある学生、この三月に卒業していく学生が、「朝日新聞」の取材に応じて、ここで学んだことを基礎にして、これから「様々な経験を積み、大きな人間になりたい」と答えました。かの女はさらに、「キャンパス・ライフは？」と聞かれて、「学生、教員、事務の方、掃除のおばさんまで、みんな仲良し！」と答えました（二〇〇七年七月十三日）。掃除のおばさんまで！わたしはこの記事を読んで、嬉しくなり、「掃除のおばさん」たちに、その新聞を配りに行きました。おばさんたち、大はしゃぎでした。これは「愛の共同体」以外の何ものでもありません。

三

ときどき聞かれることがあります。「先生は何の勉強をしているの？」これは答えるのに難しい質問です。この国の若者たちの教育がどうあるべきか、を勉強している

た。あと一冊で「マタイ福音書」は完成します。

こんな仕事をしつづけたのは、ひとつにはミルトンとこのヘンリ父子が関わった「非」国教会派とのあいだに、なにか関係がありはしまいか、という疑問を抱いたからです。ここでミルトンの『楽園の喪失』――従来はよく『失楽園』と訳されてきました――の結びをご紹介します。アダムとエバは楽園を追われます――

ふたりは思わず涙が、すぐにはらう。安息のどこかを選んで世は、眼前にひろがる。摂理こそかれらの導者。手に手をとって、さ迷いの足どりおもく、エデンを通り、寂しき道をたどっていった。

（新井明訳）

悲しみのなかにも、一人は目を上にあげ、神の摂理を頼りに「荒野」へと向かう。これはイングランドを後にした、あのピルグリム・ファーザーズの姿ではなかったのか。またイングランドにあっても、正規の宣教の道を絶たれ、僻地へと居を移さざるをえなかった非国教徒の牧会者たちの姿ではなかったのか。アダムとエバは、じつは非国教会派（とくに迷える長老派）の信徒の生き方を象徴し、かれらを励ましているのではないか。その目でヘンリ父子の書簡、聖書注解などを読むと、ミルトンからの引用とか、ミルトンへの言及に出会うことがあるのです。今のわたしは、新発田の学園の小さな森のなかで、やっとここまで辿り着きました。



学生、教員、職員と一緒に参加した綱引き大会

のです、と言えば、いちおうの答えにはなることでしょう。しかし、今回はかの質問に正面から、少し答えることといたしましょう。

卒業論文なるものを書くとき、それは今から半世紀以上も前のことですが、イギリス十七世紀の詩人・思想家ジョン・ミルトンを取り上げました。こんな難しいお人のかは、じつは扱いたくありませんでした。しかし、入江勇起男教授のご命令でした。卒論そのものの指導は福原麟太郎教授でした。なにか困難な問題にぶち当たり、先生のお部屋をお訪ねしますと、わたしの言うことは、いちおう聴いてはくださるのですが、答えは決まって、「それはあなた自身の問題でしょう」でした。勝手に考えろ、ということなのです。福原流のこの返答は、その後のわたしを支配してきたように思います。

四

アダムとエバは、ここで初めて「手に手をとる」のです。ここに真の「愛の共同体」が生まれます。わたしの目には、この「共同体」の歩みが、今一時間と空間を超えて――この世の荒野にあるこの敬和学園において実現しているのを見えてくるのです。学生、教員、職員、それから（ここが重要なのですが）「掃除のおばさん」をも含めての信頼関係の共同体が、このキャンパスの木々と同様に、様々な変容を経つつ、育つておられます。

今日もこれから雪の中、学園の小森林を見とくことにいたしました。

（二〇〇八・二・一五）

新井明（敬和学園大学長）

一九三三年生まれ。茨城県出身。内村鑑三スカラーとして、米国アーモスト大学を卒業後、ミシガン大学大学院修了。帰国後名古屋大学、東京教育大学、大妻女子大学、日本女子大学で教育・研究に携わる。

二〇〇三年度より敬和学園大学長。

●主な著書

『ミルトン』清水書院
『湘南雑記』リーベル出版
『ひとつ井戸のもとで』シャローム図書
『ホップズ』哲学者と法学徒との対話
『マタイ福音書マシュー・ヘンリ注解書』岩波書店（共訳）
『マタイ福音書マシュー・ヘンリ注解書』すぐ書房（共訳）



雪の中の小森林

アメリカ留学後、名古屋大学、東京教育大学（のちの筑波大学）、大妻女子大学、日本女子大学と勤め先を変えてきましたが、その間、ミルトンにかかわる諸問題を「あなた自身の問題」として捉えて、論文、著書、翻訳を出してきました。その一部は図書館の一角に並べられてあります。

もうひとつ、同じ十七世紀の牧会者フィリップ・ヘンリとマシュー・ヘンリ父子についてです。二人は日本では知られていませんが、あの時代の信仰者として「反」英国国教会の立場を通じた二人でした。息子のほうが残した『全・聖書注解』のなかの「マタイ福音書」だけは、わたしは日本語へと移しておきたいと願い、訳し始めました。その第一巻（マタイ福音書一章―四章分）を出したのは、一九八八年のことです。この仕事はその後もつづけて、最近第八巻（二三章―二五章分）が出版されました。

自分を信じ、まっすぐ未来へ

第十四回卒業式・卒業謝恩会

第十四回卒業式が三月十九日、聖籠町市民会館で行われ、袴やスーツなど思い思いの晴れ着で集まった百五十七名の卒業生たちが、希望に胸を膨らませて社会へ巣立っていきました。

前奏が鳴り響いた後、来賓の方々とおアカデミックガウンとキャップをまとった教員がステージに上がり、厳肅な雰囲気の中で卒業式がはじまりました。延原時行宗教部長による聖書朗読と祈祷の後、新井明学長から卒業生一人ひとりに「卒業証書・学位記」が手渡され、すべての卒業生と握手が交わされました。新井学長から卒業生諸君に対し、「皆さんは、われわれ教員・職員



たくさんの後輩たちも駆けつけました

送り、今日という日を迎えたのです。敬和の小さな森に、あなたがたの心の故郷を感じつつ、巣立って行っていただきたい。」と激励の式辞が贈られました。

KEIWA Choir (本学聖歌隊) と地元のコラス・グループによって結成されたハレルヤ・コラス、来賓の皆さまからのご祝辞、祝電が披露され、そのすべてが卒業生へのはなむけとなりました。それに応えるように、卒業生代表の坂井万里央さんが「大学生活の中、人間は優しさで繋がっていると感じる事ができ、私の自信を育ててくれました。どんなに大きな壁にぶつかったとしても、自分の可能性を信じ、まっすぐに進んで行きたいと思っております。」と力強い演説を述べました。

今年度は、成績最優秀者として藤村薫さんと高野真之介さん、坂井万里央さん、卒業表彰者として梶井沙由子さんが表彰されました。そして卒業準備委員長の田鹿幸彦さんから大・中教室用の電波時計(四百台)が卒業記念品として贈呈されました。

卒業式の後、新潟市内のホテルに会場を移して「卒業謝恩会二〇〇七」が行われました。これは卒業生からお世話になった保護者の方々並びに大学教職員への感謝の気持ちを表すものです。チャリダー部による公演もあって華やいだ雰囲気の中、卒業生たちはお世話になった方々を囲んで楽しかった大学生活を思い起こし、時間を忘れるほど会話がはずむ会となりました。

新しい世界へ旅立つ前に

卒業準備委員長 田鹿 幸彦



卒業準備委員会のメンバー集合!

卒業準備委員会の活動は、十一月の終わりから熊木尚也さん、宮澤まどかさん、坂井万里央さん、新沢昂大さん、寺尾今日子さんと私の六人ではじめました。

卒業アルバムの作成では、個人やゼミ、学生生活やサークルなどの写真を集め、思い出に浸りながら、みんなの個性が引き立つように、見やすくレイアウトしました。タイトルは、「絆」に決めました。卒業記念品には、後輩たちが授業やテストの時に、いつでも時間を確認できるようにと、大きな教室に時計を四台設置することにしました。また、卒業謝恩会の開催内容や料理などを確認しました。出し物には、準備委員の坂井さんが元部長であるチャリダー部にダンスをお願いしました。大学生活の最後に、このような貴重な経験をさせていただいたことに厚くお礼を申し上げます。

縁結びのつづきを面談



英語文化コミュニケーション学科卒業
藤村 薫

学ぶことを通していつの間にか交友関係が広がっていく、そこが大学の魅力です。学科の枠を越えて、出会った人それぞれの生き方や考え方にいい刺激を受けます。たわいもない話題のおしゃべりで盛り上がった後はほとんど記憶に残らないことが多いですが、たまに熱く語ってみたり、真剣に相談してみたり。人生のピンチやチャンス

のときには、多くの人に支えられました。干渉しないようであり、ここぞというときには力を貸す、そういう余裕のある付き合いが大学生らしいと思えました。群れているだけが仲間じゃないですね。

物事を新しく始める前にはつい打算的になりがちですが、始めようとしていることが自分にとってプラスかどうか分かって、それをひと通り終えて忘れたら分かるのだとこの四年間で気づかされました。むしろ学びや経験がいつどこにどう結びつくかわからないところが大学での勉強の面白さです。人間関係もそれに似ていると思えます。はじめから変にこだわりを持たず、出会ったありのままがいい。仲良くなったきっかけなど思い出せなくらい自然に知り合えた人たちとその縁に感謝しています。

卒業後はそれぞれの道に進み大忙しの日々だと思えますが、連絡は取り合っています。みんなの仕事の話が聞ける日を楽しみにしています。

新鮮で充実した学びの時間



国際文化学科卒業
高野 真之介

本当にあつという間の四年間でした。高校卒業と同時に就職を目指していた私に、敬和学園大学への進学を勧めてくださいましたのは高校時代の恩師でした。今思えば、就職を前にして、私はまだ自分に自信を持ち切れなかったこと、内心「もっと色々なことを学びたい」という私の本音を酌んでくださったのだと思います。

見知らぬ土地で一人暮らしを始め、これまでとは勝手の違う授業内容に最初は戸惑い、不安を抱くこともありましたが、新しい友人との出会いと交友、興味深い講義の数々はどれも新鮮で充実した時間でした。学生生活の後半には、かねてよりの希望職種であった警察官を目指す傍ら、「人が人を助ける」ということはどういうことであるかという問いを抱き、山田耕太先生や岩倉依子先生のご指導の下、その答えを中世ヨーロッパの社会福祉に見出して、研究と考察を続けてきました。

幸運にも警視庁警察員採用試験に合格し、卒業論文も仕上げ、卒業を間近に控えた今振り返れば、これ以上は望めないくらいに充実し、人間として大きく成長できた四年間でした。卒業後はこの大学で学んだことを活かし、社会人として、警察官として恥ずかしくない生き方をしたいと思っています。大学生活において出会ったすべての皆さま、本当にありがとうございました。

たくさんの方の支援に恵まれて



共生社会学科卒業
金 海順

私は共生社会学科の一期生として敬和学園大学に入学し、今年卒業します。中国の留学生として日本の福祉を学ぶことは有意義なことであり、私の成長に役立ったと思います。勉強を重ね、中国の福祉の必要性を強く感じるようになりました。

今考えると、従来の私は「障害者」について理解がなく、障害者と障害のない人との違いは支援が必要かどうかにあると思っていました。もちろん障害者は支援が必要です。しかし、初めて一人で外国に行ったら、誰もが助けを必要とするように、支援が必要なのは障害者ばかりではないことが分かりました。ただその支援の量と質の違いだけであるでしょう。

私は今まで大学からたくさん恵まれてきたことに心から感謝します。特に「留学生を支える会」からの支援は一生忘れられません。留学というのは旅行ではなく生活なので大変です。留学生のために愛を込めて準備したその支援は、私たちに大きい希望を与えてくださいました。今年無事に卒業できることも皆さまのおかげです。

大学の卒業は、私にとって自己実現に向かう始まりとも言えるでしょう。敬和学園大学の卒業生であることをいつも誇りに感じます。この大学で学んだことを社会に入って発揮していきたいと思っています。今まで本当にありがとうございました。

地域とのふれあいや学び
学生のお酒「わ」が完成!

ゼミ生たちと敬和ブランドの日本酒造りにチャレンジしました。五月に新発田市菅谷で田植えをし、九月の稲刈り、十一月からの金升酒造での仕込み、搾りを経て、一月には瓶詰めを体験しました。できあがったお酒は「わ」と名付け、学生たちは、PRやマーケティングにも取り組みました。日本酒は、地域文化学にとつての立派な「教科書」だと考えています。一升瓶の中には、酒米と農業の技術、麹・酵母と発酵文化、酒を造っている「杜氏」の知恵、新潟の歴史、文化、自然がたっぷり入っています。私のゼミでは、これらとの触れ合いによる「生きた人文学」を目指しています。これから毎年、地域の皆さんをはじめとした多くの人々に、学生たちが仕込んだ敬和のお酒を味わっていただきたいと思っています。(国際文化学科 フランク)



伝統的な手法による「搾り」作業



人いつながらから生まれた私たちの酒
英語文化コミュニケーション学科三年
佐藤 春奈

この一年を通して行ってきた私たちの日本酒造りは、田植えと稲刈り以外すべてが初めての体験でした。酒蔵に行くフィールドワークでは、毎回のよう目を見つめていたのを覚えています。

初めて酒蔵に入った時、真っ先に感じたのが「匂い」でした。私の嗅覚が特に優れていたわけでもないのに、その匂いで酔いそうになったくらいです。次に驚いたのが、酒蔵内の気温の低さです。前々から酒蔵内の気温は外よりも寒いくらいだと聞いていたのですが、作業中につま先が痛くなるほど寒いなんて思ってもみませんでした。

体験学習前には、酒造りの勉強もしました。「もろみ」や「麹」、「三段仕込み」、「並列醗酵」といった業務用語の意味を事前に理解し、また自分で体験することによって身につけることができました。気分はもう日本酒通にでもなったかのようです。

また、私がこの酒造り体験を通して一番強く感じたものは「人のつながり」です。田植えと稲刈りは地域の人と一緒にやり、酒造りは蔵の従業員さんたちに手伝ってもらいました。このように、ゼミのみんなと一緒に地域の一員として活動できたことをうれしく思っています。四月には、私たちの酒「わ」の販売が始まるので皆さんよかったですら購入してみてくださいね。ご意見、感想お待ちしております!

お餅と一緒につながる笑顔
留学生交流・餅つき大会

今年で三回目となる「留学生交流・餅つき大会」を一月十六日に開催しました。

当日は雪の降る中、留学生をはじめ学生、教職員、そして近隣の国際交流団体の皆さま総勢百人余の人が集まり、日本の食文化を通しての交流がはじまりました。餅つきは初めてという留学生もいる中、二つの臼を取り囲んで力強く杵を振る学生に、参加者全員が「ヨイショ!」と大きな掛け声をかけていました。昨年よりもたくさん用意したお餅も、参加者それぞれが、あんな、きな粉、雑煮の三種類の味を堪能したようで、アツという間になくなりました。

下準備からお餅つきの指導までしていたいた丁A北越後の青壮年部・女性部の皆さん、雑煮をつくっていただいた学食のお姉さん方に深く感謝いたします。

(国際交流委員会 田邊)



リズムを合わせて「ヨイショ!」

新発田学術センター開所から一年
地域からの学びを地域に還元する

まちの駅よろず「新発田学術センター」が二〇〇六年十一月二十九日に開所してから、一年四か月がたちました。

今年に入ってから、地元新発田のイベントにご協力する形で、一・二月の「まちなかアート探訪」の一環として、本学卒業生で新発田市出身の絵本作家 菅野由貴子さんの原画展を開催しました。

これに引き続いて、二・三月の「雪の越後の花嫁衣裳」では、外国の結婚衣装の展示と留学生によるトークショーを開催し、多くの市民の皆さまからご来場していただきました。

また、開所一周年記念講演会「成功体験を通じてまちづくりを考える」新発田のお宝をいかす道」を、約百五十名の皆さまを新発田市地域交流センターにお迎えし、三月二十二日に開催いたしました。

第一部では大分県の由布市議会議員・地



菅野由貴子さん(1期生)の絵本原画展



実践をふまえたお話に力をいただきました

域生活圏研究所主任研究員の小林華弥子さんより「由布院のまちづくり〜一〇〇の町があれば一〇〇通りのまちづくりがある」と題し、熱のこもったお話をいただきました。続いて行われた第二部では、「新潟県内のまちづくり」をテーマに本学のマーク・フランク特任講師、吉原写真館当主吉原悠博さん、第六回にいがた総おどり副会長・総合プロデューサー能登剛史さんをパネリストにしたディスカッションが行われました。

「新発田学術センター」では、今後は地元新発田の研究に力を注ぐとともに各種イベントの開催を予定しておりますので、ご協力賜りますようお願いいたします。

(新発田学術センター委員会)

将来の自分の姿を想像しながら
学内合同企業説明会を開催

「学内合同企業説明会」が二月十五日、本学体育館を会場に開催されました。当日は、昨年度を大幅に上回る九十六社百十六名の採用担当者の方々にご出席いただくことができました。

説明会が始まると、リクルートスーツ姿の学生たち約百三十名が続々と体育館に広がっていきました。すでにほとんどの学生が学外での説明会にも参加しており、余裕をもって各ブースをまわり、そして真剣な表情でお話を伺っていました。採用担当者の方々も力のこもった説明をしてください、終了予定時刻を過ぎても、熱心に学生に対応して下さる企業もありました。

ご参加いただいた企業の皆さまには心よりお礼申し上げます。

(就職委員会・就職指導室)



多くの企業の皆さまをお迎えしました

わが生涯と敬和



前宗教部長・国際文化学科教授
延原 時行

人の生涯は、予想がつきません。まだ米
国宗教学会の座長として東西哲学対話に精
魂傾注していた一九八九年に同志社の恩師
竹中正夫先生の国際電話をクレアモントで
いただく。続いて初代学長北垣宗治先生の
招聘状をお受けする。十五年にわたる欧米
での活動(うち一年はルーヴァン大学哲学
部)を切り上げて、急遽一九九一年の春、
人文系キリスト教主義大学敬和を立ち上げ
るため、哲学・神学の教授とチャブレンの
二重職に就任したのでした。あれからもう
十七年。まるで何かのスポーツに打ち込ん
だような躍動感のある幾星霜でした。まだ
正式チャペルのない敬和で宗教活動を軌道
に乗せるため、キリスト教と教育委員会の
同僚とともに苦心^{えんたん}惨憺。週報と『ブニユー
マ』の発刊がキリスト教主義の皆となりま
した。二〇〇三年度新井明現学長のご就任
とともにCAH単位化。これによりある教
育的気風を確立できました。教授職として
は、哲学、比較宗教思想、現代哲学、組織
神学ほか四つのゼミで超多忙。学生諸君と
教室で出会うのが「一番の楽しみ」でした。
日英二十冊の著訳書の刊行、紀要への十七
篇の英文寄稿は敬和の英気の一端。二月の
中旬恩師ジョン・カブ教授の遺産を祝賀す
る国際シンポで発題しての帰途、太平洋上
独立研究所への復帰の意欲満々。皆様の「
多幸を心より祈りました。

FAREWELL MESSAGE



前英語文化コミュニケーション学科教授
アラン・ブロンナー

英語の "farewell" という言葉は、ふつ
う「さようなら」を意味すると解されてい
ます。しかし、この言葉の原義は、「うま
く進む」、すなわち「成功し」続けること
への願いを表します。

敬和学園大学がこれまでうまくやってこ
られたのは、この事業の中心である先生方
が、十九世紀アメリカの思想家エマソンの
次の言葉を信じているからでしょう。

「教員の力のすべては、人は変わるこ
とができるという確信にある。人は覚醒を欲
している。魂をその臥所^{ふしど}から、その習慣的
な深い眠りから起き出させることを。」

語学、コミュニケーション、国際関係の
プログラムで敬和学園が学生たちに強く求
めているのは、人生が提供する限らない機
会に気付き、それに加わることです。そし
て、文学、哲学、宗教学、福祉のプログラ
ムを通して、敬和学園はすべての文明や文
化の礎となった伝統的な思想や価値観、考
え方を強化して教えてきました。

この十七年間、敬和学園大学で文学を教
えてきた者として、この事業の一端を担わ
せていただいたことを誇りに思うとともに、
敬和学園が今後も「うまく進み」続けるこ
とを切に願ひ、また確信しています。

I hope and trust that Keiwa College will
continue to fare well in the years ahead.

学生諸君に寄せる



前英語文化コミュニケーション学科教授
北嶋 藤郷

大河・阿賀北地方の豊かな環境の中にあ
るこの学園で、元気で教壇に立つことがで
きたことを誇りとします。おどろかだ純朴
な学生諸君に囲まれて過した日々を回顧す
れば、宮澤賢治の花巻農学校での生活詩に
結びつきます。賢治は「この四ヶ年が／わ
たくしにどんなに楽しかったか／わたくし
は毎日／鳥のように教室でうたつてくら
した／誓って云うが／わたくしはこの仕事
で／疲れをおぼえたことはない」とうたい
だしています。冒頭を(この十六ヶ年が)
とすれば、この学園でのわたしの生活を余
すところなく伝えることになるでしょう。

昨年の夏、ひとりの本学卒業生から届い
た私信をそのまま引用しておきます。

「今年度で北嶋先生が引退されるとあつ
て、非常に寂しい気持ちでいっぱいです。初
めて北嶋先生とお会いしたのは、私が高校
生の時に、学校説明会で先生のお話を聞い
た時でした。敬和に入学してこれまでの間、
北嶋先生あつての敬和!という想いですの
で、なんだか自分が大学を卒業した時より
も先生が敬和を引退なさることの方が、寂
しいです。母校から恩師がいなくなるとい
うのは、とても残念です。きっと同じよう
に思っている学生や卒業生がたくさんいる
と思います!」

教職員と学生諸氏、数多のご友人、わた
しが関わったすべての人に深謝。さらば!

退職

学生に育つた六年間



前英語文化コミュニケーション学科准教授
前嶋 和弘

敬和での六年間は私にとって、とても幸
福でした。よい同僚に恵まれ、自分が思う
ように活動することを許していただきまし
た。皆さんのご協力があり、広報委員長と
しての任務も楽しみながら進めることがで
きたと思います。何よりも学生たちとの出
会いから、多くのことを学びました。

大学の四年間というのは、長いようで短
い時間を使って学生が自分自身で成長する
期間です。でも、教員も同時に一人ひとりの
学生から育てられているのだな、と痛感
しています。学生とのちょっとした会話か
ら、教える内容についてのヒントを得るこ
とができます。それだけでなく、双方向で
やり取りをしていく中で、学生の変化を感
じ取れることがあります。うまく伝えるた
めのさまざまな工夫を続けることで、不安
そうな学生の顔が笑顔に変わっていった時
に、私自身も大きく勉強したと思うのです。

大学教員の仕事のスタートを敬和で過ご
すことができたのは、幸運以外の何物でも
ないと思います。敬和での仕事は、新聞記
者としての五年弱、大学院生兼研究員とし
ての八年弱の在米生活に続いて、社会人に
なつてからは「第三の人生」ですが、この
「三つ目」が最も気に入っています。

二〇〇八年度から文教大学に移りますが、
敬和には当分、非常勤で参ります。今後も
どうぞよろしくお願いいたします。

豊かな自然と学生たちに囲まれて



前人文学部契約講師
オリバー・ローズ

新発田で豊かでやりがいのある二年間を
過ごしてきましたが、娘が生まれたため、
妻の出身地である神戸近辺に引越すのが
よいだろうと考えました。この二年間で、
新潟の数多くの美しい土地や佐渡、また近
隣のすばらしい山々を訪ねることができま
した。新潟の雪景色のなんと美しいこと
でしょう。ほとんど積雪のなかった昨年に比
べて、今年はすいぶん雪を見ることができ、
うれしく思いました。

敬和では、小人数クラスでさまざまな科
目を個性豊かな学生たちに教えられたこと
を幸運に思います。敬和の魅力は教員と個
別に話せる小人数クラスと、そのフレンド
リーな授業の雰囲気にあると思います。こ
れは学習効果をあげる上で大変重要なこと
ですが、日本の大学ではめつたにこの形態
がとられています。学生たちに英語で話
させるのは、いつもうまくいくとは限りま
せんが、できるだけ楽しい授業にすること
で学生たちから熱心な反応が返ってきました。
この二年間で彼らが力を伸ばしていく
のを見るのは、実にうれしいことでした。

同僚の先生方、これまでのサポートとご
理解をありがとうございます。学生の皆さ
ん、学業と就職活動にがんばってください。
これから先の人生でも、皆さんが英語を使
う楽しさを味わうとともに、英語が使って
よかったと思われるように願っています。

手をのびつつかむ機会



前人文学部契約講師
シンディー・ザンボースキー

新発田にやって来た時、「ここはニュー
ジランドみたいだ」とウイリアムズ先
生に言ったものです。東京、大阪での人込
みの中の忙しい生活の後では、小さな新発
田は新鮮な空気のようでした。そして窓か
らは山々が見えるのです!

私にとって一番の思い出は学生たちと過
ごした時間です。大学生活を始める一年生
の興奮、そして学年があがるにつれて、学
生が自分の力に自信を持つようになる姿を
見るのが好きです。「ピース・スタディー
ズ」の授業では、最後のプロジェクトで「自
分でやる」ことを学びました。私は相談役
となり、学生自らが責任を持ち、自力で短
い映画を作製しました。社会に出てからも、
ここで学んだ技術を生かすよう願っています。

「コミュニケーション・スキルズ」の
授業で仕上げた「喜劇」は、本当に面白く
素晴らしいものでした。また、国際ポランテ
イアサークルと行ったタイでの経験も忘れ
られません。助けを必要としている人々に
援助の手を差し伸べつつ、人生の経験を積
むという点で、敬和の学生たちは際立つと
思います。世界にはそんな機会が山ほどあ
ります。手を伸ばしてそれをつかみさえす
ればよいのです。このような機会が用意さ
れ、しかも参加を奨励されている職場で働
くことができて幸せでした。敬和学園大学
を心からなつかしく思うでしょう。

授業で学び、視察で深める スタディツアーつき授業を開講します

四月からスタディツアーつきの授業「アメリカ研究・歴史と文化」がはじまります。ジェームズ・ブラウン先生が担当するこの授業は、教科書とインターネットを利用してアメリカの歴史などを調べ、グループでのプレゼンテーションを中心にすすめていきます（ほとんど英語で行います）。そして、夏休み（九月初旬）を利用して、授業で学んだアメリカ合衆国を実際に訪ね、博物館やホワイトハウス、独立戦争や南北戦争の戦場跡地などを視察します。

「移民の国」アメリカ。ヨーロッパから「メイフラワー号」に乗って、巡礼者父祖が大陸にやって来たのが一六二〇年です。イギリスからの独立を勝ち取り、合衆国憲法が制定されたのが一七八七年、そして奴隷解放宣言を経て一八六五年の南北戦争終結まで、現代のアメリカの骨子を形つづけた草創期のアメリカの歴史を辿りつづ、皆さんと一緒に、現在のアメリカへの理解を深めていきます。

開講日時 毎週火曜日
一九時から二〇時三〇分
ツアー 九月初旬約一週間の予定
費用については後日お知らせ
(最少実施人数一〇名)

※一般の方は、科目等履修生としてご参加いただけます。詳しくは、下記のご案内をご覧ください。

学生たちとともに学ぶ機会を提供 科目等履修生・研究生のご案内

本学では、一般の方を対象に、自分の関心のある授業のみを受講できる科目等履修生制度を設け、毎年多くの方々にご利用いただいています。開講科目は、語学、文化、法律、政治、経済、福祉関係等さまざま、一部、夜間に開講している授業もございます。受講者の方々の顔ぶれも多彩で、こうした方々との交流は、学生にとっても大変貴重な経験になっています。

他に、特定の研究テーマについて本学教員から個別指導を受け、より深く掘り下げた学習ができる研究生制度もございます。詳細は、教務課教務係までお問い合わせください。
(教務委員会・教務係)

●科目等履修生の募集

対象 高等学校以上を卒業した方
またはこれと同等以上の学力があると認められる方

授業料 一単位につき、一万円

出願期間 (前期) 四月十一日～二十五日
(後期) 九月二十六日～十月十日

※受講できる科目や研究生制度等につきましては、お問い合わせください。

いずれもお問合せ、お申込みは、
敬和学園大学教務課教務係まで
TEL 〇二五四―二六一―二五〇四
e-mail kyomu@keiwa-c.ac.jp

地域の生涯学習をバックアップ—オープン・カレッジのご案内

敬和学園大学は、今年度も各種公開講座を、本学会場をはじめとした新潟県内各地で開催いたします。今年度の総合テーマは「いのちを見つめて」とし、生きるということをさまざまな視点から考えていく講座を実施していきます。長年好評をいただいております新発田市と聖籠町、新潟市北区

(旧豊栄地区)、三条市のオープン・カレッジに加え、毎年恒例の児童文学の集中講座や、各学科・研究所主催のさまざまなイベントなども開きます。

皆さまの身近なテーマや会場を選んでいただき、お気軽にご参加いただければ幸いです。お待ちしております。(広報委員会)

<2008年度オープン・カレッジ 総合テーマ「いのちを見つめて」>

敬和学園大学クリスマス・チャリティ講演会 (新発田市生涯学習センター)
12月6日(土) 「「愛する」ということ」 渡辺和子 ノートルダム清心学園理事長
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)

敬和学園大学 児童文学講座
5月17日(土)、18日(日)「英米絵本のたのしみ2」(その1) 吉田新一 立教大学名誉教授、児童文学者
6月21日(土)、22日(日)「英米絵本のたのしみ2」(その2) 吉田新一 立教大学名誉教授、児童文学者
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)

新発田市オープン・カレッジ (新発田市生涯学習センター)
6月5日(木) 「いのちの尊さ」 山田耕太 教授
6月12日(木) 「生と死を見つめて—文化人類学からの提案—」 神田より子 教授
6月19日(木) 「暮らしの先にある死」 山崎ハコネ 講師
6月26日(木) 「テネシー・ウィリアムズと罪の意識」 市川節夫 東京女学館大学教授
7月3日(木) 「病気の子どもたちに教えられたこと」 大澤洋 教授
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)

新潟市北区オープン・カレッジ (豊栄地区ふれあいセンター)
6月11日(水) 「健康に生きる」 久島公夫 教授
6月18日(水) 「アメリカ環境文学にみるいのち」 平塚博 講師
6月25日(水) 「顔の心理学」 益谷真 教授
※お問合せ 新潟市豊栄地区公民館 (Tel 025-387-2014)

聖籠町オープン・カレッジ (聖籠町町民会館)
10月9日(木) 「現代のことば遣いが表すもの」 上野恵美子 教授
10月16日(木) 「環境といのち—京都から洞爺湖へ—」 上野文子 教授
10月23日(木) 「いのちの選別」 青山良子 准教授
※お問合せ 聖籠町町民会館 (Tel 0254-27-2121)

三条市オープン・カレッジ (三条市中央公民館)
10月14日(火) 「国際社会による人権保障」 藤本晃嗣 講師
10月21日(火) 「生きることと学ぶこと—生活を通して学ぶ—」 藤伊一 准教授
10月28日(火) 「『個』を強くするインターネット」 藤伊一 准教授
※お問合せ 三条市中央公民館 (Tel 0256-32-4811)

その他のイベント
8月2日(土) 第7回中学・高校英語科教員対象リフレッシュ・セミナー (英語文化コミュニケーション学科主催)
10月4日(土) 共生社会学科公開学術講演会「夢・自立・文化」 尹基(ユン・キ) 社会福祉法人こころの家族理事長
10月26日(日) 国際文化学科長杯 外国語スピーチ・コンテスト
11月16日(日) 人文社会科学研究所 研究発表「ステークホルダーとのパートナーシップ形成を目指すコミュニケーションの比較研究」
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)

充実した第二の人生をおくる シニア入試のご案内

若い時にもっと勉強したかった。時間に余裕のできた今こそ勉強したい。第二の人生に備えて、もう一度大学で学んで自分を高めたい。シニア世代にこのような希望を持つ方が増えています。

敬和学園大学は、そのような方々を対象にシニア入学制度を設けています。高校卒業程度の学力をお持ちの五十五歳以上の方を対象とし、入学免除の特権を受けられ、また在学年限を四年から八年の間で自由に選択することができます。入学試験では学力試験を課さず、二回の面接で計四名の教員と相談し、ご自分の関心と敬和のプログラムがマッチすることを納得していただいた上で入学を決めていただきます。

学問は人と人との出会いの中で深まるものです。敬和学園大学は人間的な温かみのある学びの機会を提供しています。
(入試委員長 矢嶋)



大学施設を開放しています

敬和学園大学では、地域の皆さまに図書館やグラウンド、体育館を開放しています。

●図書館

蔵書の閲覧は自由に行えます。貸出しをご希望の方は、初回のみ身分証明書を持参の上、平日の九時から十七時三〇分にお越しください。「図書館利用証」を発行します。開館日・時間については、お問い合わせください。
図書館 TEL 〇二五四―二六一―二五九一
e-mail toshokan@keiwa-c.ac.jp

●体育館・グラウンド・テニスコート

グラウンド・体育館・テニスコートは、大学の授業やクラブ活動等が優先され、その空いた時間を一般の方に開放しています。貸出し希望日の一ヶ月前までにご連絡ください。学内行事と調整の上、ご連絡します。(体育館および人工芝テニスコートの利用には使用料がかかります)

施設係 TEL 〇二五四―二六一―二六一八
e-mail shisetsu@keiwa-c.ac.jp

そのほか、授業のない日には、各種試験等の会場として教室の貸出しも行っています。お気軽にご相談ください。(総務課)



同窓会リレー・エッセイ⑥
日本の言葉と文化を伝えていきます

一九九六年度卒業
丸山 隆也

卒業後十一年が過ぎ、また学生に帰ることになりました。四月から桜美林大学の修士課程に通います。敬和学園大学在学中に「日本語教師」という職業の存在を知り、十代のころから抱いていた「海外で現地の人々の暮らしや文化に触れたい」という夢が、「海外の人たち（特に子ども）に日本語や日本文化を教えたい」という志に固まっていたことが思い出されます。

アルバイトをしながら、日本語教師養成講座を受講し、資格を取得した時には卒業後三年が経っていました。その後は民間の国際交流団体の派遣で、三ヶ月間アメリカの小学校へ行って日本文化を紹介したり、東京の日本語学校で主に中国人の成人の皆さんに日本語や日本文化を教えたりしながら、経験を積むことに努めました。

二〇〇五年から二年間は、JICAのプロジェクトで、南米はボリビアのオキナワ移住地の日系三世の子どもたちに日本語を教えました。そこで、日本語を不自由なく話せるのに、読むことにはあまり熱意のない子どもたちがいることに気付きました。大学院では、そのような彼らの読むことに対する意識や行動を、移住地社会という環境に置いて掘り下げて研究し、あわせて自分の教授能力を磨く、という課題を持って取り組んでいきたいと思っています。

寄付者ご芳名

一般 春名康範、市村忠信・重子、

木原和彦、河野彦一、

松井愛美、松井れい子、

村上毅二、中村けい子、

野本寛子、重永則子、

島本健二、鈴木敏、

鷹澤信子、土谷良泉、

矢野光三、ヨナ英会話教室、

日本基督教団東中通教会、

日本基督教団東中通教会婦人会、

日本基督教団伊丹教会、

日本基督教団小出教会、

日本基督教団見附教会、

日本基督教団新潟信濃町教会、

日本基督教団新津教会、

新潟YWCA、オレンジ会

新田和子

一九九二組

本間幸子、町野史枝、齋藤篤

金子美由紀、丸山仁史、

二瓶伸江、呉賢欄

石月愛(旧姓:池田)

一九九五組

一九九八組

五十嵐亜希

大久保秀樹

小淵康而、鷹澤昭一、

新井明三、

敬和学園大学後援会②、

長澤バザー(敬和祭)

学事予告

◆四月 学年始め

一日 入学式

四日 新入生保護者ガイダンス

七日 後援会総会

七日 一年外国語ガイダンス

八日 プレイスマント・テスト

八日 健康診断(八日まで)

九日 二・三年ガイダンス

十日 一年ガイダンス

十日 新入生歓迎公開学術講演会

十一日 履修相談日

十一日 前期講義開始

十一日 履修登録期間(十七日まで)

十一日 外国人留学生懇談会

十五日 学費前納入最終日(二〇四年)

十七日 履修登録提出期間(十八日まで)

十七日 新入生オリエンテーション(二十五日まで)

二十四日 履修登録確認期間(五月七日まで)

◆五月 創立記念日振替休日

十九日 日本語・日文化研修プログラム(TCLEP)

十九日 創立記念日(六月十四日まで)

◆六月 社会福祉現場実習(事前実習②)

五日 スポーツ大会

七日 社会福祉現場実習①(二十一日まで)

九日 留学生の集い

二十三日 創立記念日

二十八日 高校・大学合同研修会

キャンパス日誌

1月

4日 一般入試(A日程)、外国人留学生入試(1期)、編入学試験(2期)出願(~22日)、一般入試(B日程)出願(~25日)、センター試験利用入試(1期)出願(~2月1日)

5日 講義再開

9日 教授会

10日 卒業論文提出締切日

11日 チャペル・アッセンブリ・アワー①

最終講義(決別説教) 延原時行 宗教部長(写真)

「もう一度、綱をおろしなさい」

最終講義 北嶋藤郷 教授(写真)

「私的方法論としての“断章取義”

~団栗を踏む旅人~」

15日 補講日(~17,21日)

16日 留学生交流・餅つき大会

18日 チャペル・アッセンブリ・アワー②

説教 新井明 学長

「なぜ私たちがなく、あなたが?」

後期エッセイコンテスト授賞式(写真)

学生団体年度内表彰式

ケリー・ニューエル奨学金授与式

後期資格取得奨励奨学金授与式

後期講義終了

19日 大学入試センター試験(~20日)

22日 後期末試験(~2月2日)

27日 一般入試(A日程)、外国人留学生入試(1期)、編入学入試(2期)

社会福祉士国家試験(朱鷺メッセ)

29日 英語文化コミュニケーション学科卒業論文発表会(写真)

30日 一般入試(B日程)

教授会

31日 社会福祉現場実習2報告会

阿賀黎明中学校イングリッシュ・セミナー(~2月1日、写真)

理事会

2月

1日 一般入試(A・B日程)、外国人留学生入試(1期)、編入学入試(2期)合格発表

3日 春期休暇(~3月31日)

4日 後期集中講義(~8日)

6日 教授会

8日 センター試験利用入試(1期)合格発表

11日 一般入試(C日程)、外国人留学生入試(2期)、

編入学試験(3期)出願(~3月6日)、

センター利用入試(2期)出願(~26日)

13日 後期末追試験(~15日)

15日 学内合同企業説明会(96社、116名、写真)

18日 後期集中講義(~21日)

20日 教授会

KIVサークル国際ボランティア(タイ、~3月2日、写真)

26日 再試験(~27日)

3月

3日 図書館蔵書点検(~25日)

4日 センター試験利用入試(3期)出願(~20日)

5日 教授会

7日 センター試験利用入試(2期)合格発表

11日 一般入試(C日程)、外国人留学生入試(2期)、編入学試験(3期)

教授会

13日 一般入試(C日程)、外国人留学生(2期)、

編入学試験(3期)合格発表

19日 第14回卒業式(聖籠町町民会館)

卒業謝恩会2007(新潟グランドホテル、写真)

22日 新発田学研究センター1周年記念講演会

「成功体験を通じてまちづくりを考える」

(新発田市地域交流センター、150名)

講演 小林華弥子 由布市議会議員(写真)

「由布院のまちづくり」

パネルディスカッション

マーク・フランク 講師

吉原悠博 吉原写真館当主

能登剛史 第6回にいがた総おどり副会長

「新潟県内のまちづくり」

センター試験利用入試(3期)合格発表

27日 理事会・評議員会

31日 学年終わり

社会福祉士国家試験合格発表